

日本旧石器学会

ニュースレター 第44号

NEWS LETTER No. 44

JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION



3万年前の航海 徹底再現プロジェクト (2016-2019)

海部陽介 (国立科学博物館)

はじめに

このプロジェクトは、琉球列島を舞台に、後期旧石器時代人の航海を再現することを目標に据えた実験考古学的企画で、国立科学博物館（東京）と国立台湾史前文化博物館（台東県）による国際共同プロジェクトだった。その経緯と成果は拙著（海部2020）に詳述しているので、ここでは概要を述べた上で、他ではあまり語っていないプロジェクトの理念と運営について、記すこととしたい。

概要と目的

プロジェクトは、2013年3月に筆者が主催した研究会に端を発し、3年の“準備期間”を経て、2016年の予算獲得から“正式発足”した。2019年度末をもって事業を終了するが、学術論文文化などの作業はその後も継続する。

目指したのは、旧石器人の航海がどのようなものであったのか、彼らが海でどのような困難に遭遇し、それらをどう乗り越えたのかを知ること、つまり祖先たちの航海そのものを体験することにあっ

た。

実験航海をするには、当時の舟や航海術についてモデルを作らなければならない。そのための物的証拠、つまり遺跡出土遺物は乏しいので、「実験しながら選択肢をつぶす」消去法を採用することにした。私たちは実験を繰り返す中で、候補に上がっていた草束舟・竹筏舟の限界を知り（図1, 2）、最後の実験航海は丸木舟で、琉球列島への南の入口にあたる、台湾→与那国島の海峡横断に成功した（図3, 2019年7月7～9日）。

プロジェクトチーム

プロジェクトは、考古学、自然人類学、文化人類学、海洋学、植物学などの専門家による学際研究であったことはもちろん、舟製作を担う職人や、舟漕ぎの熟練者（シーカヤッカー）ら非研究者も大勢参加した、総合プロジェクトであった。研究者と冒険家が行動を共にするのは稀だが、分野や立場にこだわらず各方面のエキスパートを招き入れて、考える最高のものを目指した。トール・ハイエルダール

以来、世界各地で多数行われている実験航海の中で、本プロジェクトの強みは、この総合力にあると自負している。

さらに事務局の運営も適任者に恵まれ、台湾側のパートナーも最高の人材に巡り会ったこと、そして所属先の国立科学博物館の全面的サポートを受けられたことが、この予測不能で困難なプロジェクトを成功させた原動力であったと感じている。例えば、私自身も当初は海の男たちとの考え



図1 2016年に与那国島で製作した草束舟



図2 2017年に台湾で製作した竹筏舟

方の違いに戸惑うことが多かった。それが時間とともに解消されていったのは、事務局スタッフの影の支えがあったからである。

チームの面々は、皆それぞれのフィールドで自立したプライド高き者たちである。旧石器人のバンドとは異なって、いわば寄せ集めであるこのチームの運営を円滑にするため、筆者がリーダーとして気を配ったのは、誰もが遠慮なく自分の意見を言える空気を作ることだった。もちろん最終的な決定権はリーダーにあるが、互いの意見を聞き、合意に基づいて前進させていくことは大事だった。

オープンサイエンスとクラウドファンディング

通常の研究では、分析を終えて結論が出てから成果を公表する。しかし本プロジェクトは、実行の過程が格別面白くなるのが最初から見えていたので、オープンサイエンスのかたちを模索することにした。すなわち、旧石器時代研究の面白さを伝えるのはもちろん、普段は研究者だけが味わうことのできる発見の喜びと問題解決の醍醐味を、一般社会とも広く共有したいと考えたのである。

一方でプロジェクトの着想当時は、必要な資金が得られず、なかなか実行に入ることができなかった。チームに民間人を多数招き入れ、海での安全管理を行い、記録撮影を充実させ、広報にも力を入れ

るための費用は膨大で、通常の研究用公的資金で賄えそうにはなかった。そこで最終的にたどりついたのが、林良博国立科学博物館館長から勧められたクラウドファンディングだった。

その実施に当たっては、運営会社のReadyfor社からアドバイスを受けたが、これは筆者が「人とつながるスキル」を身につける上でとても有益だった。当初は店を開いて待っていればよいと勘違いしていたのだが、クラウドファンディングを成功させるためには、最初から最後まで訴え続けなければならないことを知った。不慣れなSNSをはじめ、チラシを配り歩き、お願いのために方々を回った経験は、社会の中で研究者のあるべき位置を見つめ直す上でも、貴重な体験となった。

クラウドファンディングに成功し、日本と台湾での寄付・募金を合わせて1億円規模のプロジェクトとなったが、結果的に、この資金獲得法はオープンサイエンスの理念とよくマッチしていることに気づいた。クラウドファンディングの支援者は、博物館が提供するリターンにも興味があるが、何よりもプロジェクトそのものに関心を持っていてくれる。そこでマスコミよりも優先的に、メールニュースや報告会などのかたちで、支援者へ積極的な情報提供を行ってきた。最後の実験航海では、安全と記録のために丸木舟のGPSログをライブで陸上本部と海上保



図3 2019年の丸木舟の実験航海の様子

安庁に送っていたが、これをクラウドファンディング支援者にも提供したことは、とても喜んでもらえた。

結果的に、遠い過去へ目を向けることの意義を、多くの人々に効果的に伝えることができたように思うのだが、それはプロジェクトの最大の成果の1つだろう。なお、実験の学術的成果は一部公表済みだが (Kaifu et al. 2019), 他については論文を準備中である。

日本の強み？

一連の実験活動を通じて心強かったのは、日本考古学がこれまでに蓄積してきた膨大なデータである。ホモ・サピエンスの渡来時期や経路についてのモデル作りに活かせる旧石器遺跡データが充実しているのはもちろん、旧石器時代の舟を類推する上では縄文時代のデータが役立った。証拠がない旧石器時代について検討するに当たって、「縄文の技術を越えない」という条件を課していたからである。縄文時代の丸木舟は、間接的証拠による例も含めれば、全国から160ほども知られている。このようなデータがある地域は、世界にもそうあるものではないが、これがあるから旧石器時代の技術について可能性を絞ることができた。

そのような意味で、日本は研究上たいへん恵まれ

た地域だと思う。そのような環境を整えてくれた先人たちに感謝しつつ、今後も、日本の強みを活かした研究を続けていきたい。

文献

海部陽介 (2020) 「サピエンス日本上陸 3万年前の大航海」講談社。

Kaifu et al.(2019) Palaeolithic seafaring in East Asia: testing the bamboo raft hypothesis. *Antiquity* 93, 1424-1441. (オープンアクセス)

北京原人第1頭骨発見90周年国際古人類シンポジウム参加記

尾田識好（東京都埋蔵文化財センター）

中国の考古学者Pei Wenzhong氏が、北京市房山区の周口店で北京原人の完全な頭蓋骨を発見してちょうど90年。それを記念したシンポジウムが、2019年12月2日～4日に中国北京市にて開催された。

スケジュールは次のとおりである。2日：記念式典、記念講演、基調講演、3日：ミッド・シンポジウム・エクスカージョン、4日：研究発表。5日～8日にはポスト・エクスカージョンが設定されていた。日本の旧石器研究者としては、阿子島香、佐藤宏之、佐川正敏、出穂雅実、加藤真二、竹花和晴、内藤裕一、洪恵媛、王晗の諸氏と尾田のほか、韓国から大谷薫氏が参加した。

記念講演では、John W. Olsen氏とWu Xiujie氏が中国を含むアジアの最近の人類学的・考古学的成果を取り上げ、人類の進化と拡散、それによる地域的多様性の出現プロセスを展望した。

基調講演は、前半部が中国や東南アジア、ヨーロッパにおける人類学的研究、後半部が中国やアルタイ、韓国における考古学的研究の発表であった。特に、中国陝西省藍田の石器が約210万年前に遡り、人類の出アフリカがこれまで考えられていたよりかなり早い可能性があること（Robin Dennell氏）、デニソワ人がチベット高原の厳しい環境に早くから適応したことを示す研究成果（Chen Fahu氏）は、大いに注目された。

3日のエクスカージョンでは、周口店と遺跡博物館を訪れた。第1地点（猿人洞）には、雨や雪、日光などの影響を受けないうよう、約3,700㎡以上にわたる屋根が設置され、圧巻の遺跡保護であった。新

たに開館した博物館では、広大なスペースに並んだ展示品を、詳しい解説とともに観ることができた。

4日はセッションごとに研究発表が行われた。テーマは、「1：旧石器考古学」、「2：古人類学と学際研究」、「3：周口店とスヤング」である。筆者が参加したセッション3は、第24回スヤング国際シンポジウムでもあり、中国や韓国、日本の東アジアから東南アジア、さらにポーランド、デンマークの前期旧石器時代から新石器時代の多岐にわたる発表がなされた。とりわけ、スヤング遺跡第VI地点第3・4文化層は、東アジアにおける石刃と細石刃の出現を考える上で重要な資料となるであろう。

ポスト・エクスカージョンでは、福建省三明市の万寿岩遺跡を訪れた。遺跡と周辺は「万寿岩国家考古遺跡公園」として整備されている（2019年6月開園）。石灰岩にできた3つの洞窟からなり、年代は約20～3万年前である。「南の周口店」と呼ばれ、削器類を中心としたツールや石核等の石器、骨角器、動物化石などが多数出土している。博物館展示では、最終氷期最盛期に陸続きであった台湾との関係がクローズアップされており、南方ルートによる日本列島への人類の移住を考える上でも興味深い遺跡であった。

シンポジウムを通じて、アジアの旧石器時代における人類学的多様性をあらためて実感した。その研究動向を押さえつつ、どのように考古学的成果を統合し、アジアの人類史を再構築していくのか、自分なりに考えるまたとない機会となった。



シンポジウム参加者

日本旧石器学会第 18 回総会・研究発表・ シンポジウム延期のお知らせ

2020年6月13・14日に札幌国際大学で予定しておりましたが、第18回総会・研究発表・シンポジウムは、新型コロナウイルス感染拡大の状況を鑑み、開催を延期することといたしました。開催時期については、改めて学会ウェブサイトやニュースレター等でご案内いたします。ご参加を予定されていた皆さまには、ご迷惑をおかけして申し訳ありません。

日本旧石器学会
会長 阿子島 香

日本旧石器学会役員選挙結果の お知らせ

2020年3月1日から20日に郵送で行われた次期日本旧石器学会役員選挙の投票に関し、開票作業を4月12日に行いました。集計結果を下記の通り報告します。

1. 場所：開票場所は宮城県仙台市青葉区内。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、開票結果の確認、集計は、オンライン会議で行った。
2. 日時：2020年4月12日 10：00～12：00
3. 開票作業：伊藤 健（選挙管理委員長），西井 幸雄（選挙管理委員），市田直一郎（選挙管理委員），佐野勝宏（総務委員長）。
4. 得票数
 - 1) 郵送投票枚数 103枚
 - 2) 郵送有効投票枚数 103枚
 - 3) 投票数 983票
 - 4) 有効投票数 983票
5. 当選者

7地区の上位得票者1名（○印）と、それ以外の得票数上位15名が当選者。

氏名	投票数	地域	順位
赤井文人 あかいふみと	38	北海道	9
出穂雅実 いずほまさみ	42	関東	6
沖野 実 おきのみのる	27	中四国	○
尾田識好 おだのりよし	56	関東	4
越知睦和 おちよしかず	38	九州・沖縄	9
小野章太郎 おのしょうたろう	39	東北	○
加藤 学 かとうまなぶ	48	中部	5
門脇誠二 かどわきせいじ	40	中部	7
国武貞克 くにたけさだかつ	57	近畿	2
熊谷亮介 くまがいらょうすけ	19	東北	15
小原俊行 こはらとしゆき	27	関東	11
佐藤宏之 さとうひろゆき	69	関東	○
沢田 敦 さわだあつし	53	中部	○
下岡順直 したおかよりなお	27	関東	11
諏訪間順 すわまじゆん	67	関東	1
高倉 純 たかくらじゆん	41	北海道	○
高屋敷飛鳥 たかやしきあすか	39	関東	8
平澤 悠 ひらさわゆう	26	中四国	13
森先一貴 もりさきかずき	74	近畿	○
山崎真治 やまさきしんじ	45	九州・沖縄	○
山田和史 やまだかずふみ	25	関東	14
渡辺丈彦 わたなべたけひこ	57	関東	2

以上の当選者の他、得票数が1票から2票の方が27名いました。その合計は、29票です。

なお、選挙当選者は通常であれば6月の総会で承認を受けた後、次期役員となります。しかしながら、今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため総会を延期させていただくことから、選挙結果の承認方法に関しては別途ご案内いたします。

四国旧石器遺跡 マッピングパーティーの開催

2019年12月7日（土），レキシルとくしま（徳島県埋蔵文化財総合センター）において，四国旧石器遺跡マッピングパーティーを開催した（（公財）徳島県埋蔵文化財センター，中・四国旧石器文化談話会との共催）。参加者は香川，愛媛，高知県から各1名と，地元徳島県からデータベース（DB）委員の氏家敏之氏を含む2名，DB委員会から野口淳氏，光石の計7名である。

2016年の秋田に始まったマッピングパーティーも回を重ねて10回をこえ，今回は2019年2月の福岡に続いて西日本での開催となった。当日は10時から16時の日程で，これまでに各地で開催してきたプログラムを踏襲し，主に午前にレクチャー，午後は実習という形で進めた。

午前の部は，野口氏から「日本旧石器学会“日本の旧石器時代遺跡”データベースをアップデートする」と題して，今回の旧石器DBの更新作業についての基本的な方針などについて，光石からは「旧石器データベース更新作業の着眼点」として，2010年版で実際に起こっている座標の錯誤など，具体的な問題についての解説である。引き続いて，GoogleDriveへのアクセスなど基本的な操作の説明をおこなった。

午後の部では，各自が持参した端末を使って更新作業の実務を体験した。参加者からは活発な質疑が飛び交い，関心の高さがうかがえた。基本的な考え方や操作は習得できたのではないだろうか。

最後の1時間弱で，野口氏からひなたGIS¹⁾や，旧石器DBを素材とした自身の分析事例について紹介された。実践例では，特殊なアプリケーションを使うことなく，誰でもが使えるMS-Excelなどを使っているという主旨の紹介があり，活用にあたってのハードルを下げ，関心を高めることにつながったのではないかと思う。

マッピングパーティー自体は小人数での開催となったが，和気あいあいと進めることができ，総じて熱心に取り組んでいただいた印象をもった。四国地方は各県の件数もコンパクトであり，早めに成果があがれば良いと期待している。委員会側からうまくサポートしながら，進捗に努めたい。

開催に際して，会場の準備をはじめとして，氏家



会場のようす

氏を初めとする地元徳島の皆様にご尽力いただいた。記して感謝申し上げます。また，これからも各地での開催を企画するとともに，DB更新を着実に進めていきたいと考えている。引き続き，会員の皆様の御助力をお願いしたい。

註

1) <https://hgis.pref.miyazaki.lg.jp/hinata/>

（データベース委員会 光石鳴巳）

日本旧石器学会研究グループ 2019年度活動報告

1. 郡家今城遺跡再整理グループ

郡家今城遺跡の再整理作業の目的は，次の3点である。

1. 報告書に正確な実測図が掲げられているにもかかわらず，その実態がはっきりしない礫群の内実を把握すること。
2. 国府石器群の標識的な遺跡の一つと目される同遺跡の石器群を，個体別資料レベルで把握すること。
3. 礫・石器の悉皆遺物台帳を作成し，これに対応する遺物No.付分布図を作成すること。

第1，第2の目的を達成する手段としては，ひたすら接合をすることであるという認識から，この1年は礫，石器ともひたすら接合作業に専念した。第3の目的については，報告書に掲載されていない資料に，ナイフ形石器の調整加工の際に生じたと考え

られる小剥片・碎片が多数あり、これに資料No.を与え資料化・遺物台帳を作成するための基礎作業に専念した。

これらの作業によって、多くの研究者の縦横の分析に資するところとなることを願って作業している。以下に、三つの目的について、作業内容とその達成度をもう少し具体的に説明する。

【目的1】

礫群はチャート礫を主とし、これに砂岩・泥岩・石英斑岩が主要構成礫として加わる。報告書では礫群構成礫数の提示はなく、18基の礫群単位合計の重量及び推定個体数451個体と、概数は示されていたが、これらの個体数を正確に把握するためには、接合作業をさらに一層推し進める必要性が感じられた。

これまでの約2年間の接合作業の結果、あくまで暫定値であるが、礫群構成礫5,056点、858個体と把握している。ただし、現状では作業すればするほどまだまだ接合が進むという状況であり、一定程度の正確さで個体数を推し量るには道半ばというのが実感である。

【目的2】

改めて述べるまでもなく、石器の大部分はサヌカイト製であり、個体識別ははなはだしく困難であり、その結果接合にも難渋することが予想された。このため、同一群内・ブロック内・ブロック間・群間、あるいはナイフ形石器と碎片間といった形の総当たり方式で接合例を増やすべく接合作業を実施している。その結果、新しく十数組の接合資料が把握され、その経過で、一定程度の個体識別の可能性も予感されつつあるのが現状である。

【目的3】

報告書はその紙幅制限のために、記載は主要資料に限られていて、ナイフ形石器の調整加工に関連するような多数の碎片類の実質的提示がないことが惜しまれた。しかしながら、発掘当時（1973～74）の記録は、礫・石器とも全点縮尺1/1という驚くべき精度で実測・記録され、その膨大な記録が発掘後45年以上を経過した今日でも全点保管されており、既報告の正確な分布図に対応する悉皆遺物台帳を製作することが出来ることがはっきりしたため、これを目標にすることとした。

現状では、報告書非掲載の碎片類を含めた総資料数の8割程度の登録が済んだところである。これら

の資料に対応する分布図上の記号に遺物番号を付す作業はおおむね完成し、最終点検作業を残すのみとなっている。

(鈴木忠司)

2. 旧石器基礎研究・次世代育成研究グループ

諸科学においては基礎研究の重要性は認識されながらも、どうしても新奇な研究に目を奪われがちである。本グループでは、旧石器時代における基礎研究について重要性と方向性を再確認し、その進展を目指すうえで、阿子島香学会長の発言にもあるように「新たな世代、いわゆる後進の育成は喫緊の課題である」との問題意識を踏まえ、若手研究者（主に考古学専攻生）の次世代育成研究（実践）を行うことを目的とした。その目的にそって、2019年度は以下4回の研究会を持った。

第1回 2019年6月15日

場所：神奈川県相模原市旧石器ハテナ館（共催）
内容：相模原市博物館と共催で田名向原遺跡のある旧石器ハテナ館において、相模野台地の旧石器の基礎観察会を行い、相模野の旧石器に関するシンポジウムに参加した。

第2回 2019年8月24日・25日

場所：長野県八風山安山岩原産地および和田峠黒曜石原産地
内容：長野県の八風山安山岩原産地および和田峠黒曜石原産地において、原産地遺跡群とはどのような性格をもつものか、そして原石はどのような産状なのかの踏査を行った。また、礫群による石蒸し料理の実験を行い、礫群の機能を考えた。

第3回 2019年9月22日

場所：東京都埋蔵文化財センター（共催）
内容：旧石器の石器製作とはどのような技術によるのか、学会員の大場正善氏を講師に、石器製作の技術を観察する機会を設けた。

第4回 2020年2月16日

場所：岩宿博物館（共催）
内容：第3回の「石器製作技術観察会」を発展的にするために、大場正善氏（学会員）および小菅将夫氏（岩宿博物館・学会員）を講師

に、観察だけでなく、10名の学生達に実際に石器製作を行う機会を設け、尖頭器の製作を行った。初めて石を割る学生も多く、よい経験になったと考える。

上記4回において、多くの日本旧石器学会員の参加や援助をうけ、旧石器に関心のある考古学専攻生は13の大学から通算30名以上の参加を得、この課題に関する重要性を再認識した。

(堤 隆)



長野県八風山安山岩原産地の踏査風景

お知らせ

メーリングリストの運用について

日本旧石器学会ではメーリングリストの運用を行っています。これは学会からの連絡手段として利用するとともに、情報交換の場として活用していくために設けたものです。今回の第18回総会・研究発表・シンポジウムの延期のような行事などの変更の際に、より迅速にお知らせすることが可能となります。未登録の会員諸氏におかれましては、メーリングリストへの登録についてご協力下さい。登録ご希望の場合は、メールアドレスを事務局のメールアドレス (jimu@palaeolithic.jp) までお知らせください。速やかにご利用いただけるようにします。強制するものではありませんが、ご協力をお願い申し上げます。

会費納入・住所変更手続きのお願い

日本旧石器学会は、皆様の会費によって運営されていますので、会費は原則前納制としております。本ニュースレター同封の払込取扱票を用いて、今年度分会費の納入をお願いします。振込先は、日本旧石器学会 郵便振替番号00180-8-408055です。全国の郵便局で簡単に手続きいただけます。これまでもお知らせしておりますとおり、**2018年度より年会費が6,000円になりました**。御理解のほどよろしくお願い申し上げます。

また、会費滞納は本会運営に大きな支障を招く原因になりますので、同封の会費納入状況を御確認のうえ、2017年度以前の会費を未納の方は、未納分もあわせて納入をお願いいたします。

転居をされた方は、必ず住所変更の手続きをお願いいたします。郵便局に転居届を出されていても、本会では郵便局以外の配送会社を利用していますので転送していただけません。会費納入の際に払込取扱票に新住所を記載いただくか、または事務局までメール等で御連絡ください。

日本旧石器学会入会申込み手続きについて

日本旧石器学会入会申込みにつきましては、入会申込書を日本旧石器学会ホームページからダウンロード (<http://palaeolithic.jp/join.htm>) し、必要事項を記載の上、日本旧石器学会事務局へ郵送してください。入会資格審査にあたっては論文等著作物の提出を求める場合があります。ご協力ください。

日本旧石器学会ニュースレター 第44号

2020年5月1日発行

編集: 日本旧石器学会ニュースレター委員会

橋詰 潤・馬籠亮道・山崎真治

発行: 日本旧石器学会

事務局: 〒192-0364

東京都八王子市南大沢1-1

東京都立大学人文社会学部

人文学科 歴史学・考古学教室 気付

E-mail jimu@palaeolithic.jp

HP <http://palaeolithic.jp/index.htm>